

資料

看護学生が受講する看護過程演習に関する文献検討

高岡 哲子・木口 幸子・辻 幸美・藤長 すが子

(2021年1月5日受稿)

抄録： 目的：本研究の目的は、日本国内の看護学生が受講する看護過程演習の文献検討を行ない、研究動向を概観し、今後の看護過程教授法に対する課題を明らかにすることである。

方法：対象となる文献の抽出は、医学中央雑誌 Web 版 Ver.5 で、2020 年 12 月に Key Word「看護過程演習」と「看護学生」で「and」検索を行い、このうち看護過程演習に関連しない文献と研究方法が不明確な文献を除外し、49 件を分析対象とした。49 文献はマトリックス方式で整理した。「研究の焦点」は内容分析の手法を用いてカテゴリー化した。

結果および考察：文献 49 件から抽出されたカテゴリーは【看護過程教育の評価視点 (7)】と【看護過程演習教授法の学習効果の検討 (11)】でコードは 18 件であった。【看護過程評価の基準 (7)】では「学生の学び (8)」や「学生の自己評価 (5)」等、評価の方向性は明らかにされていたため、今後は、具体的な評価基準を明らかにする必要がある。【看護過程演習教授法の学習効果の検討 (11)】では、授業中の教授方法については様々な取り組みがされていたことが明らかになったため、今後は、授業中だけではなく学生が主体的に繰り返し学習できる教材作成の必要性が示唆された。

キーワード：看護学生、看護過程演習、教授法

I. 序論

千田ら¹⁾は、基礎看護学実習Ⅱにおける学生の学びに「患者の個別性と自立性を考えた看護過程の展開」が抽出されていたと述べていた。このことから、基礎看護学実習において、学びの一つに看護過程の展開が含まれていることがわかった。しかし、金子ら²⁾は、2年次に履修する基礎看護学実習における看護学生のストレス因子のひとつに「看護過程の展開」が抽出されていたと報告していた。また、千田ら³⁾は文献検討を行い、成人看護学実習の困難感に「看護過程の展開と記録の記載方法」が含まれていたと報告していた。このように、看護学生は、看護過程の展開を実践することへの困難感を持っていることがわかる。このため、看護過程展開の授業目標達成に加えて、できるだけ実習中の看護過程の展開に関する学生の負担感を軽減するために、前段となる看護過程演

習を各領域で実施していた。岩月ら⁴⁾は、看護学生3年に対する看護過程演習の学生のアンケート記述において、アセスメントに関しては学んだことに関連した記述数が少なく、困難だったことのほうに圧倒的に記述が多かったことは、情報に基づく憶測、裏付け、推測へとしていく段階で、学生が自分なりに行ったアセスメントが妥当なものかどうか、本当にこれでいいのだろうかと悩みながら行っている姿も、本研究で明らかになった⁴⁾と報告していた。つまり、看護学生は、演習においても、看護過程の展開に対して困難感を持っていることがわかる。これらのことから看護学生が看護過程を展開するための新たなツールの開発が必要だと考えた。そこで、看護学生が履修する看護過程演習に関する文献検討を行うことで、より効果的な教授方法を開発するための基礎資料となるのではないかと考えた。

Ⅱ. 目的

本研究の目的は、日本国内の看護学生が受講する看護過程演習の文献検討を行ない、研究動向を概観し、今後の看護過程教授法に対する課題を明らかにすることである。

Ⅲ. 方法

1. 対象となる文献の抽出

医学中央雑誌Web版Ver.5で、2020年12月にKey Word「看護過程演習」と「看護学生」で「and」検索を行い、原著論文で絞り込みを行なった結果、54件が抽出された。このうち看護過程演習に関連しない文献と研究方法が不明確な文献を除外し、最終的に49件を分析対象とした。

2. 分析方法

49文献はマトリックス方式で整理した。基本フォルダの縦軸は文献で、横軸は「掲載年」「対象者および協力者の特性」「研究方法」「中心テーマ」「結果」「結論」などで、「研究の焦点」は内容分析の手法を用いてカテゴリー化した。

Ⅳ. 結果

1. 文献の概要

表1 文献の掲載年

n=49		
掲載年	文献数	%
2002	1	2.0
2003	4	8.2
2004	1	2.0
2005	2	4.1
2006	1	2.0
2007	2	4.1
2008	2	4.1
2009	4	8.2
2010	7	14.3
2011	5	10.2
2012	3	6.1
2013	4	8.2
2014	7	14.3
2015	0	0.0
2016	0	0.0
2017	2	4.1
2018	1	2.0
2019	2	4.1
2020	1	2.0

1) 経年別文献数の推移

文献の掲載年を表1に示す。年代を制限せずに検索した結果、2002年から2020年の間で文献が抽出されたが、2015年と2016年は0件であった。2010年と2014年が7件（14.3%）と最も多く、次に、2011年 が5件（10.2 %）、2003年、2009年、2013年が4件（8.2 %）であった。その他2012年 が3件（6.1%）、2005年、2007年、2008年、2017年、2019年が2件（4.1%）、2002年、2004年、2006年、2018年、2020年が1件（2.0%）であった。

2) 対象者および協力者の特性

対象者および協力者の特性は表2に示す。対象者および協力者は「文献」の1件を除いてすべてが看護学生であった。内訳は、「看護学生2年」が25件（51.0%）と最も多く、次に「看護学生3年」が15件（30.6%）、であった。「看護学生1年」「看護学生2年3年」が3件（6.1%）、「看護学生4年」「看護学生1年2年」が1件（2.0%）であった。対象者および協力者の所属教育機関は、「大学」が25件（52.1%）と最も多く、次に「短期大学」13件（27.1%）、専門学校7件（14.6%）「不明」が3件（6.3%）であった。

3) 研究方法の特徴

研究方法は表3に示す。データ収集方法は「質問紙」が30件（61.2%）と最も多く、次が「面接法」6件（12.2%）、「レポート」5件（10.2%）、「自己評価表」4件（8.2%）「学生の患者に対する質問」「関連図評価表」「自己評価表と教員による学生評

表2 対象者及び協力者の特性

項目		文献数	%
対象者及び協力者	看護学生：1年	3	6.1
	看護学生：2年	25	51.0
	看護学生：3年	15	30.6
	看護学生：4年	1	2.0
	看護学生：1年2年	1	2.0
	看護学生：2年3年	3	6.1
	文献	1	2.0
対象者及び協力者の 所属教育機関	専門学校	7	14.6
	短期大学	13	27.1
	大学	25	52.1
	不明	3	6.3

*「対象者及び協力者の所属教育機関」は文献を除外

価」「文献」が1件（2.0％）であった。

データ分析方法は、「質的研究」が19件（38.8％）、「量的研究」が18件（36.7％）、「トライアングレーション」が12件（24.5％）であった。

2. 研究の焦点

研究の焦点は表4に示す。文献49件から抽出されたカテゴリーは2件でコードは22件であった。以下に【カテゴリー（コード数）】、[コード（文献数）]を示す。

抽出されたカテゴリーは【看護過程教育の評価視点（7）】と【看護過程演習教授法の学習効果の検討（11）】であった。

1) 看護過程教育の評価視点

【看護過程教育の評価視点】は、[学生の学び（8）] [学生の自己評価（5）] [学生の成長（4）] [学生の理解度（3）] [学生がもつ学習に対する困難感（2）] [学生の自己課題（1）] [学生の達成感（1）]によって構成されていた。

[学生の成長（4）]に含まれていた末永ら⁵⁾は学生の「わかる」という概念は、「(1) わからないことがわからない (2) わからないことがわかる (3) わからないことを解決する方法がわからない (4) わからないことを解決する方法がわかる (5) (事例の身体の中での病気、病態、症状、看護問題・アセスメントの仕方、援助計画立案が)

わかった」に集約できる5階層であると報告した⁶⁾。また、[学生の自己評価（5）]に含まれていた自己評価を基にグループワークを効果のあるものにするには、個人ワークでの学習を強化する必要があることが示唆された。

[学生が持つ学習に対する困難感（2）]に含まれていた村上ら⁷⁾は【リアリティのある患者のイメージが難しい】という困難さについては、模擬患者の活用を、【情報と枠組みの理解が難しい】という困難さには、知識の補いを、【情報の因果関係の理解が難しい】という困難さに対しては繰り返しトレーニングを行うことの重要性などを述べていた。

2) 看護過程演習教授法の学習効果の検討

【看護過程演習教授法の学習効果の検討（11）】は、[ロールプレイングの導入（6）] [指導者の工夫（3）] [講義順序性の工夫（2）] [紙上事例の工夫（2）] [視聴覚教材の活用（2）] [演習による長期的学習（1）] [IBLの導入（1）] [PBLテュートリアルの導入（1）] [各看護理論を基盤とした学習（1）] [情報収集演習の導入（1）] [シナリオシミュレーション演習の効果（1）] [グループワークによる習得状況（1）] [SP導入の効果（1）] [TBL導入の効果（1）] [ポートフォリオ評価の導入（1）]によって構成されていた。

表3 研究方法

	項目	文献数	%
データ収集方法	質問紙	30	61.2
	面接法	6	12.2
	レポート	5	10.2
	自己評価表	4	8.2
	学生の患者に対する質問	1	2.0
	関連図評価表	1	2.0
	自己評価と教員による学生評価	1	2.0
	文献	1	2.0
データ分析方法	質	19	38.8
	量	18	36.7
	トライアングレーション	12	24.5

表4 研究の焦点

		n=49	
カテゴリー	コード	文献数	
看護過程教育の評価視点 (7)	学生の学び	8	16.3
	学生の自己評価	5	10.2
	学生の成長	4	8.2
	学生の理解度	3	6.1
	学生がもつ学習に対する困難感	2	4.1
	学生の自己課題	1	2.0
	学生の達成感	1	2.0
看護過程演習教授法の 学習効果の検討 (11)	ロールプレイングの導入	6	12.2
	指導者の工夫	3	6.1
	講義の順序性の工夫	2	4.1
	紙上事例の工夫	2	4.1
	視聴覚教材の活用	2	4.1
	演習による長期的学習	1	2.0
	TBLの導入	1	2.0
	PBLテュートリアル導入	1	2.0
	各看護理論を基盤した学習	1	2.0
	情報収集演習の導入	1	2.0
	シナリオシミュレーション演習の効果	1	2.0
	グループワークによる習得状況	1	2.0
	SP導入の効果	1	2.0
	TBL導入の効果	1	2.0
	ポートフォリオ評価の導入	1	2.0

V. 考察

1. 文献の概要

1) 経年変化別文献数の推移

基礎看護学教育における講義前の看護過程に対する学生の思いを明らかにした新山ら⁸⁾は、思いの中に【困難なイメージ】があったことを報告した。このように、看護学生は看護過程について苦手意識を持っていることがわかる。このため、看護教員は、教授法の質を高めることを努力をするため、文献が抽出されたものとする。特に2010年と2014年が7件（14.3%）と最も多かった。2010年の文献数増加について、文部科学省は、2002年に大学における看護実践能力の育成の充実に向けた文章を発表している⁹⁾。この中で、看護実践能力の育成について、教育方法については、多くの大学で創意と工夫をしつつ方法の検証をしている時期にあるとしていた。つまり2002年以降は各大学において、教育方法の検証を行い始めたことが推測できる。この看護実践能力の基盤の一つとして看護の展開方法があり、看護過程の展開方法として『看護基本技術』の実践は、この看護の展開方法を確実に活かして、一人の対象者の

状況を相対的に判断しながら行うものとして位置づけられた。このため、適切に看護展開が実践できることは重要であることから2003年以降研究が積み重ねられ、2010年の文献数増加につながったものと推測する。

2014年の文献数増加について、厚生労働省¹⁰⁾は、看護教育の内容と方法に関する検討会報告書で現状の課題として臨地実習では実際に対象者の看護を行うことよりも看護過程の展開における思考のプロセスに重きを置いて指導することが多く、技術等を実践する機会が減少している場合も見受けられるとした。一方で卒業時の到達目標として「Ⅱ 根拠に基づき、看護を計画的に実践する能力」が挙げられていることから、臨地実習の事前準備として学内で看護過程の展開を確実に修得することで臨地実習において、技術等を実践する機会が増えると共に、卒業到達目標Ⅱに近づくことにもつながるため、文献数が増えたものと考えられる。

2) 対象者および協力者の特性

対象者および協力者の特性は、「文献」を対象とした論文以外は、すべて看護学生を対象とした研究であった。この中でも看護学生2年を対象と

した研究が25件 (51.0%) と半数を占めていた。先に述べたように看護学生は、看護過程の展開を受講する前から【困難なイメージ】を持っていた⁸⁾。困難なイメージは学習効果を低下させる危険性がある。このため、看護過程の展開を初めて学習する看護学生に対してスムーズに導入するためにも教授法について研究が多くなされていたものとする。さらに看護学生3年も15名 (30.6%) と他の学年と比較して多かった。これは、臨地実習を困難と感じる要因の一つとして、看護過程の展開³⁾ が挙げられているためであると推測する。臨地実習では本来、患者と実際に接することで多くの学びを得ることができるが、看護過程の展開を実施することで学生が疲弊してしまう危険性もある。このため臨地実習を多く履修する看護学生3年も対象となっているものとする。このように、看護過程の展開を初めて履修する看護学生2年と臨地実習を多く履修する看護学生3年を対象となっているものと推測する。

3) 研究方法の特徴

データ収集方法では、質問紙を活用した文献が30件 (61.2%) と多かった。その他、学生のレポートや自己評価表などの授業の成果物を活用した研究も抽出された。このように学生の成果物を使用することは学びの内容等は明らかにしやすいと考えるが、倫理的課題をクリアする必要もあることから質問紙が多く使用されたものとする。質問紙を使用した研究は、量的分析方法だけではなく矢嶋ら¹¹⁾の研究のように、質的帰納的に分析されるなど分析方法が多様化していた。このため、質的分析方法と量的分析方法がバランスよく抽出されたものとする。また、質的研究と量的研究がバランスよく抽出されたことは、本研究領域はある程度研究が進んでいることが推測される。このため、今後も研究の積み重ねが重要であると考えられる。

2. 研究の焦点

1) 看護過程教育の評価視点

【看護過程教育の評価視点 (7)】では、[学生の学び (8)] や [学生の自己評価 (5)] 等、評価に関わる視点が抽出された。評価の視点は客観的な評価だけではなく [学生が持つ学習に対する困難感 (3)] や [学生の達成感 (1)] などの学生の主観的評価基準も抽出されていた。先に述べたように、学生が学習に対して困難感を持つことは、学習の妨げになる危険性があるため、評価の視点に含まれたものとする。ただし、[学生の成長 (4)] のうち末永ら⁵⁾のように成長を「わかり方」で確認したり、[学生の自己評価 (5)] に含まれていた椎野ら⁶⁾のように、自己評価を基に個人ワークでの学習を強化する必要性を報告するなど、学生の評価だけではなく学習方法の評価にも活用されていた。このように、多くの評価の視点を持つことは適切な評価につながる可能性を高くするため、今後も評価基準を明らかにする研究が必要であると判断する。ただし、評価の方向性は明らかにされているが、具体的な視点を明らかにする研究は体系的には行われていないため、今後は、具体的な評価の視点を明らかにする研究が行われる必要があると考える。

[学生が持つ学習に対する困難感 (2)] に含まれていた村上ら⁷⁾の【情報の因果関係の理解が難しい】という困難さに対しては繰り返しトレーニングを行うことの重要性などを述べていた。しかし、授業内だけでの看護過程の展開は臨地実習を含めても数十回であり、修得までには至らない危険性がある。よって、学生が自己学習において繰り返し学べるシステムを開発する必要性が示唆された。

2) 看護過程演習教授法の学習効果の検討

【看護過程演習教授法の学習効果の検討 (11)】は、[ロールプレイングの導入 (6)] [視聴覚教材の活用 (2)] [IBLの導入 (1)] [PBLチュートリアル¹²⁾の導入 (1)] シナリオシミュレーション演習の効果 (1)] [SP導入の効果 (1)] [TBL導入の効果 (1)] [ポートフォリオ評価の導入 (1)] など、様々な学習方法を導入し、この効果を確認し

ていた。これは、学生が苦手意識を持つ看護過程の展開の教授法の精度を高めるための取り組みであると判断する。しかし、看護過程を展開する回数は、先にも述べたように臨地実習を含めて数十回であり、回数が少ないことが推測される。このため、授業中だけではなく学生が主体的に自己学習で看護過程の展開が行える教材開発を行う必要がある。

3. 看護的示唆

【看護過程教育の評価視点 (7)】では「学生の学び (8)」や「学生の自己評価 (5)」等、評価の方向性は明らかにされていた。今後は、具体的な評価基準を明らかにする必要がある。

【看護過程演習教授法の学習効果の検討 (11)】では、教員は多くの教授方法を試行錯誤しながらも精度を高めるための取り組みがされていたことが明らかとなったが、今後は、授業中だけではなく学生が主体的に繰り返し学習できる教材作成が必要であると考えられる。

VI. 結論

本文献検討の結果、以下のことが明らかとなった。

1. 対象および協力者は、看護過程の展開を初めて学ぶ看護学生2年と看護過程の展開を活用して行う臨地実習が多い看護学生3年が多かった。
2. 研究の焦点では、【看護過程教育の評価視点 (7)】と【看護過程演習教授法の学習効果の検討 (11)】が抽出された。
3. 看護過程評価の方向性は明らかにされていたため、今後は具体的な評価基準を明らかにする必要性が示唆された。
4. 授業中の教授方法については様々な取り組みがされていたことが明らかになったため、今後は、授業中だけではなく学生が主体的に繰り返し学習できる教材作成の必要性が示唆された。

なお、本研究は、第30回日本看護学教育学会学術集会で発表したものに加筆修正を加えた。

文 献

- 1) 千田美紀子, 今井恵, 松永早苗, 井上美代江, 辻敏子, 井下照代, 上野範子, 森下妙子: A看護大学の基礎看護学実習Ⅱにおける学生の学びの分析, 聖泉看護学研究, 4, 47-54, 2015.
- 2) 金子さゆり, 樺野香苗: 基礎看護学実習における看護学生のストレス因子構造と対処行動, 名古屋市立大学看護学部紀要, 14, 51-59, 2015.
- 3) 千田寛子, 堀越政孝, 武居明美, 越井英美子, 恩幣宏美, 岡美千代, 神田清子, 二渡玉江: 成人看護学実習における看護学生の抱える困難感の分析, 群馬保健学紀要, 32, 15-22, 2011.
- 4) 岩月すみ江, 武分祥子, 所沢好美: 看護過程演習における評価と課題-成人看護学実習前演習の振り返り用紙の分析, 飯田女子短期大学紀要, 25, 179-190, 2008.
- 5) 末永 真由美, 大園 孝子, 金子 道子: 看護過程演習から実習を通して学生の「わかり方」と「成長」, 鹿児島純心女子大学看護栄養学部紀要, 15, 83-94, 2011.
- 6) 椎野 雅代, 江藤 和子: 学生のグループワークを取り入れた精神看護学看護過程演習の自己評価の比較, 日本看護学会論文集 精神看護, 43, 151-154, 2013.
- 7) 村上 大介, 木村 涼子, 桑名 行雄: 看護過程におけるアセスメントの困難さに対する教育方法, 東北文化学園大学看護学科紀要, 7 (1), 39-47, 2018.
- 8) 新山悦子, 島田三: 基礎看護学教育における講義前の看護糧に対する学生の思い, 川崎医療福祉学会誌, 17 (2), 431-435, 2008.
- 9) 文部科学省: 中央審議会

<https://www.mext.go.jp/component/>

- b_menu/shingi/toushin/__.icsFiles/
afieldfile/2012/10/04/1325048_1.pdf
(2020.12.18)
- 10) 厚生労働省：看護教育の内容と方法に関する
検討会報告書
[https://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/
2r9852000001310q-att/2r9852000001314m.
pdf](https://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/2r9852000001310q-att/2r9852000001314m.pdf) (2020.12.18)
- 11) 矢嶋 美恵子, 廣井 寿美, 阿久澤 智恵子, 高木
由美子, 古屋 敦子, 相澤 康子, 森 早苗, 富宇
加 圭子, 大島 ゆかり：小児看護過程演習に
おける学生の学び 情報収集ガイドの活用と
関連図の指導案を用いて, 日本看護学会論文
集 小児看護, 40, 168-170, 2010.

A Literature Review of Nursing Process Practicums Learned by Nursing Students

TAKAOKA Tetsuko, KIGUCHI Sachiko, TSUJI Yukimi and FUJINAGA Sugako

Abstract: Purpose: This study aims to inquire into research trends through a literature review of nursing process practicums learned by nursing students in Japan. Based on the results, we will identify the issues involved in teaching methods for nursing process practicums in the future.

Methods: We searched the Ichushi Web database Ver. 5 for articles using the keywords “nursing process practicum” and “nursing students”, connected with “and” in December of 2020. Excluding articles that were not related to nursing process practicum and articles where research methods were not clearly described, we reviewed 49 articles and organized them using a matrix format. The “focus of research” was categorized using content analysis techniques.

Results and discussion: Two categories were extracted from the 49 articles: [Criteria for nursing process evaluation (7)] and [Evaluation of teaching methods and learning outcomes of nursing process practicums (11)], with 18 codes. In [Criteria for nursing process evaluation (7)], the articles reported the background to evaluation, such as “Student learning (8)” and “Student self-assessment (5)”. Further studies are needed to establish specific evaluation criteria. In [Evaluation of teaching methods and learning outcomes of nursing process practicums (11)], the articles reported that a range of approaches were used for the teaching methods during class. The findings suggest that it is necessary to create teaching materials that enable students to learn independently and are able to repeat the learning attempted.

Keywords: nursing students nursing process practicums learned Teaching Method